

令和 6 年 5 月 23 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K11357

研究課題名(和文) 球技における「ホリスティック・コーチング」に関する実践知の解明

研究課題名(英文) Clarification of practical knowledge on "Holistic Coaching" in ball games

研究代表者

會田 宏 (Aida, Hiroshi)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：90241801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：近年、球技のコーチングでは、競技力を構成する要素(戦術力、技術力、心的・知的能力、体力)を個別に強化し、統合させるという方法では競技力を合理的に高められないという認識が広まり、要素間の関連性や調和を重視しながら競技力全体を包括的に高めていく「ホリスティック・コーチング」という方法が注目されている。本研究では「ホリスティック・コーチング」を行い、実績を上げている卓越した指導者と、選手の育成強化に関する語りを対話的・共同的に構築し、「ホリスティック・コーチング」で働いている指導に関する実践知を現場のリアリティが表現できるように構造化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、球技のコーチングにおける新たなパラダイムである「ホリスティック・コーチング」に関する実践知の構造を解明する点、科学的分析がなじまないと言われているコーチング学における実践知に関する研究を活性化させる点にある。社会的意義は、次世代を担う若手コーチに、複雑な要因が絡み合う中で発揮されるコーチングの「目標像」を示し、「ホリスティック・コーチング」を実践するために身につけるべき知識や能力、積むべき経験を提示する点にある。

研究成果の概要(英文)：In recent years, there has been a wide spread recognition in the coaching of ball games that emphasizing on individual components (tactical skill, technique, mental and intellectual ability, physical strength) and integrating them does not effectively improve competitive skills. Therefore, a method called "Holistic Coaching", which emphasizes the relationship and harmony between the components while comprehensively improving the overall competitive skills, is attracting attention. In this study, the narrative about player development and enhancement with excellent coaches who have accomplished results through "Holistic Coaching" was constructed interactively and collaboratively, and the practical knowledge related to the coaching in "Holistic Coaching" has been structured so that the reality of the field can be expressed.

研究分野：コーチング学

キーワード：球技 コーチング学 実践知 Holism

## 1. 研究開始当初の背景

球技における個人の競技力は、戦術力、技術力、心的・知的能力、体力の4つの要素で構成されると捉えられている (Hohmann, 1985; Beyer, 1987; Roth, 1989; Müller et al., 1992)。そのため球技における個人の競技力の養成では、4つの要素それぞれを合理的にトレーニングし、それを加算して大きな競技力を生み出すという考え方が主流になっていた (金子, 2007)。しかし現在、この還元主義的なコーチングは否定されつつある。例えば「以前はテクニックとして考えられていた変化のない状況で動きのパターンを作り上げることは、応用の効かないアクションを身につけることになる」(ポル, 2017)、「サッカーを4つの要素に分けて別々にトレーニングすることは上達・強化に結びつかない」(ヤンコフスキ, 2016)などがそれを表現している。このような、コーチングにおける「全体を部分に還元できない」という認識は“Holism in sports coaching”(Cassidy, 2010)と言われ、分化された要素の「統合」ではなく「調和的強化」が目指される。具体的には「使える技術が増えると戦術の選択肢は広がる。戦術が広がると体力の消耗を抑えられる」(阿部・渡辺, 2008)と述べられるように、要素の「関連」「繋がり」「包括」「バランス」が強調される。このような認識に基づく指導、すなわち「ホリスティック・コーチング」は、味方との合わせ、相手との対応など、さまざまな能力が求められる球技選手へのコーチングにおいて新たなパラダイムになっている。その実践に必要な能力の解明は、コーチング学の発展およびコーチの育成に必要な不可欠と考えられてはいるが、着手されていない。依然として、競技力を構成する4つの個別要素を高めるトレーニング内容や方法に関する研究が主要テーマになっている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、球技のコーチングにおいて新たに芽生えている「ホリスティック・コーチング」に必要な能力、すなわち指導に関する実践知を、それを行い、実績を上げているコーチの思考に根ざした形で構造化し、次世代を担う若手コーチの育成に寄与できる知見として実践現場に提供することであった。この目的を達成するために、以下の3つの課題を設定し、それぞれ解決した。

- (1) 卓越したコーチの持つ「ホリスティック・コーチング」に関する実践知の収集
- (2) 「ホリスティック・コーチング」に関する個別事例の提示、実践知の解釈および構造化
- (3) コーチ育成に寄与できる知見の提示

## 3. 研究の方法

- (1) 卓越したコーチの持つ「ホリスティック・コーチング」に関する実践知の収集

### インタビュー・ガイドの作成

「ホリスティック・コーチング」を実践するコーチは、一つひとつの状況を直観的に把握し、正確な問題領域に的を絞って指導できる (藤原, 2012)。そのような指導で働いている実践知は、実践と省察とを長年繰り返すことで、無自覚的に、暗黙的に獲得される知であり、個人的・経験的・不定形な知 (ベナー, 2004) である。そのため、それを妥当性と信頼性を持って明らかにする方法は十分に確立されておらず、国内外を問わずほとんど研究されていない。

そこで本研究では、「ホリスティック・コーチング」を実践しているコーチ、ならびに「ホリスティック・コーチング」を受けて高い競技力を獲得した選手とともに、選手の育成強化に関する語りについて、対話的・共同的に構築できるインタビューの標準的な流れ (インタビュー・ガイド) を作成した。

### 研究協力者の選定

スノーボール・サンプリング法を用いて、国内トップレベルの実績を持つコーチ11名と国際レベルの実績を持つ選手8名を研究協力者として選定した。専門種目の内訳は、ハンドボールのコーチ5名、バスケットボールのコーチ4名と選手8名、テニスのコーチ2名であった。調査に先立ち、いずれの研究協力者にも本研究の趣旨を説明し、調査に関する了解を得た。研究協力者には、原則として調査の1~2週間前に、コーチヒストリーまたはアスリートヒストリーに関する内省を活性化させるアンケート調査票をメールにて送信し、記述・返信させ、それをインタビュー時の補助資料とした。インタビュー調査は、開発したインタビュー・ガイドに則って行った。

- (2) 「ホリスティック・コーチング」に関する個別事例の提示、実践知の解釈および構造化

研究協力者の語りに関する分析では、以下のa~cの3つの手順を踏んだ。a) インタビュー調査における全ての発言内容からトランスクリプト (逐語録) を作成した、b) それぞれのトランスクリプトを精読し、「ホリスティック・コーチング」に関する発言に着目して研究協力者ごとに語りの内容としてまとめた、c) 語りの内容を考察し、「ホリスティック・コーチング」に関する実践知を個別事例としてまとめた。次に、個別事例の内容から「チームや選手が違って共通すると思われること」を選び出し、それらの共通性および特殊性について考察し、個別事例を超えた一般性をもつ理論の構築 (構造化) を試みた。

### (3) コーチ育成に寄与できる知見の提示

学術的意味を持つ研究成果に関しては、日本体育・スポーツ・健康学会機関誌「体育学研究」、日本コーチング学会機関誌「コーチング学研究」、日本ハンドボール学会機関誌「ハンドボールリサーチ」などにおいて学術論文として発表するとともに、関連する学会大会などで口頭発表した。実践現場に提供できる研究成果に関しては、我が国のコーチ育成に寄与できる情報として整理し、ウェブサイトなどで公開した。これらを通して、他の研究者や実践現場のコーチと「ホリスティック・コーチング」に関して意見交換できる環境を整えた。

## 4. 研究成果

### (1) 「ホリスティック・コーチング」において達成目標とされるプレー像

国際レベルで活躍した女子バスケットボール選手8名を対象に、バスケットボールの代表的なグループ戦術であるピックプレーとその防御に関するインタビュー調査を行い、その語りを質的に分析した。その結果、卓越した選手達は、「間合い」「位置取り」「ねらい」などに関して攻防間でせめぎ合いやかけ引きを行っていること、1対1の状況下では視覚から状況を把握しているが、対峙しなければいけない人数が2人に増えた状況下では視覚、聴覚、触覚を駆使して複雑な状況を把握していること、プレーに関する計画や構想を実践する力と、それをゲーム状況や自らの戦術力、技術力、心的・知的能力、体力に合わせて微調整し、実践する力を兼ね備えていることが明らかになった。また、この3点が、球技における「ホリスティック・コーチング」において達成目標とされるプレー像であることが示された。

### (2) チームの競技力を高める「ホリスティック・コーチング」の理念

学生バスケットボール界を牽引する3名のコーチを対象に、個人の競技力とチームの競技力をつなぎ合わせる実践的思考に関するインタビュー調査を行い、その語りを質的に分析した。その結果、卓越したバスケットボールコーチは、チームをまとめ、競技力を高めていくにあたり、選手に自らの「個性」「エゴ」を存分に発揮させる中で、「周囲の人間との関係性」に気づかせ、メンバー間の相互信頼のもとで選手を自立させようとしていること、選手たちが主体的に行動選択できる環境を作り、それを一定の「枠」を意識しながら見守ること、選手にチーム内での「役割」とそれに付随する「責任」を自発的に生み出させることを重視していることが示された。

### (3) 育成年代における「ホリスティック・コーチング」の実際

小学生年代における全国大会で上位の成績を収めたハンドボールコーチ2名を対象に、シュート指導で重要視している要点に関するインタビュー調査を行い、その語りをSCATを用いてステップコーディングした。その際、シュート指導の実践知をストーリー・ラインとして記述・外化し、質的に分析した。その結果、育成年代の卓越したコーチは、シュート指導において、シュートコース、タイミング、球速、ボール把持、正しい投げ方の6項目に代表される合理的なシュートフォームの形成を重視していることが明らかになった。このことは、育成年代における個人の競技力を向上させるコーチングでは、技術力が重視されていることを示している。しかし、コーチの語りからは、ゴールキーパーとの駆け引き（戦術力）を、技術力とアンビバレントかつ重要な要素として捉え、個人の競技力の養成に葛藤している様子も窺えた。

## <引用文献>

- 阿部一佳・渡辺雅弘(2008)バドミントンの指導理論1(第2版). 特定非営利活動法人日本バドミントン指導者連盟, p.2.
- ベナー: 早野真佐子 訳(2004)エキスパートナーズとの対話 - ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理. 照林社, p.178.
- Beyer, E. (1987) Wörterbuch der Sportwissenschaft. Verlag Karl Hofmann.
- Cassidy, T. (2010). Holism in sports coaching: Beyond humanistic psychology. International Journal of Sports Science and Coaching, 5(4): 439-443.
- 藤原裕美子(2012)第5章 人を相手とする専門職 2 看護師. 金井壽宏・楠見孝 編 実践知 エキスパートの知性. 有斐閣, pp.206-207.
- Hohmann, A. (1985) Zur Struktur der komplexen Sportspielleistung: trainingswissenschaftliche Leistungsdiagnostik im Wasserball. Czwalina, p.68.
- 金子明友(2007)身体知の構造. 明和出版.
- Müller, M., Stein, H. G. and Konzag, I. (1992) Handball spielend trainieren. Sportverlag, pp.9-11.
- ボル: 坪井健太郎 訳(2017)バルセロナフィジカルトレーニングメソッド. カンゼン, p.26.
- Roth, K. (1989) Taktik im Sportspiel. Verlag Karl Hofmann, p.23.
- ヤンコフスキ: フットボールウィークリー編集部 訳(2016)日本人に教えた戦術的なピリオダイゼーション入門. 東邦出版, p.3.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 松本 沙羅, 會田 宏	4. 巻 68
2. 論文標題 球技のグループ戦術で働いている実践知の構造:バスケットボールのピックプレイを対象として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 15-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5432/jjpehss.22081	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤本 元, 中村 剛, 會田 宏, 山田 永子	4. 巻 68
2. 論文標題 高度な戦術を作り上げようとする球技チームにおける監督の状況把握能力に関する一考察: 戦術評価の動感視点を中心として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5432/jjpehss.22080	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Keisuke Hiramoto, Aida Hiroshi, Fujimoto Hajime, Yamada Eiko, Gomez Miguel-?ngel	4. 巻 22
2. 論文標題 The relationship between shots and rebounded areas in handball games	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Performance Analysis in Sport	6. 最初と最後の頁 467-478
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/24748668.2022.2079891	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kato R, Kameda T, Yamada E, Fujimoto H, Aida H	4. 巻 -
2. 論文標題 Machine learning for handball game analysis using valid statistics linked to victory	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the 9th International Performance Analysis Workshop and Conference & 5th IACSS Conference	6. 最初と最後の頁 118-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉永 祐貴, 中山 紗織, 會田 宏	4. 巻 11
2. 論文標題 小学生年代のハンドボールにおけるシュート力向上のための技術的要点: 全国大会で優れた成績を収めたチームの指導者の語りを手がかりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ハンドボールリサーチ	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎 浩輔, 小俣 貴洋, 會田 宏	4. 巻 11
2. 論文標題 ハンドボールの試合における流れの認識に関する事例的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ハンドボールリサーチ	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本 沙羅, 會田 宏	4. 巻 35(1)
2. 論文標題 バスケットボールにおける初級者に対するドリブルレイアップシュートのコーチング事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コーチング学研究	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24776/jcoaching.35.1_127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計31件(うち招待講演 3件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 會田 宏
2. 発表標題 コーチング学における戦術研究の展望
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 仲澤 翔大, 小井土 正亮, 藤本 元, 會田 宏
2. 発表標題 バスケットボール指導者の有効な「権限の行使」に関する一考察
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 仲澤 翔大, 小井土 正亮, 藤本 元, 會田 宏
2. 発表標題 バスケットボール選手の組織コミットメントを高めるコーチング 大学男子カテゴリーにおける3名の卓越した指導者を対象に
3. 学会等名 日本コーチング学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 會田 宏, 伊藤 雅充, 佐良土 茂樹
2. 発表標題 コーチング学における実践研究の最前線
3. 学会等名 日本コーチング学会第34回大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉永 祐貴, 中山 紗織, 會田 宏
2. 発表標題 全国小学生大会で優れた成績を収めたコーチのシュート指導の要点
3. 学会等名 日本ハンドボール学会第11回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 長門 功, 東海林 祐子
2. 発表標題 高校野球指導者における投手起用の判断基準の検討 高校野球指導者のネットワーク形成と怪我認知の関連
3. 学会等名 日本体育・スポーツ経営学会第46回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nakayama S, Yamada E, Fujimoto H, Aida H
2. 発表標題 Notational analysis on the shooting play of left-handed right backcourt players in women's handball
3. 学会等名 13th World Congress of Performance Analysis of Sport 2022 & 13th International Symposium on Computer Science in Sport 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本 沙羅, 會田 宏
2. 発表標題 国際レベルで活躍した女子バスケットボール選手におけるグループ戦術の実践知に関する事例研究
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉永 祐貴, 中山 紗織, 會田 宏
2. 発表標題 小学生年代のハンドボールにおけるシュート指導の着眼点 全国大会で上位の成績を収めた1名の指導者を対象に
3. 学会等名 日本ハンドボール学会第10回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiramoto K., Aida H., Fujimoto H., Yamada E.
2. 発表標題 The relationship between shots and rebounded areas in handball matches
3. 学会等名 9th International Performance Analysis Workshop and Conference & 5th International Conference of Computer Science in Sports Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kato R., Kameda T., Yamada E., Fujimoto H., Aida H.
2. 発表標題 Machine learning for handball game analysis using valid statistics linked to victory
3. 学会等名 9th International Performance Analysis Workshop and Conference & 5th International Conference of Computer Science in Sports Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nemes R., Ichimura S., Moriguchi T.
2. 発表標題 Characterisation of Asian handball, based on a comparative analysis of the region's two leading national teams
3. 学会等名 EHF 6th Scientific Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本 沙羅, 會田 宏
2. 発表標題 バスケットボールにおけるピックプレイの実践知に関する事例研究 卓越した1名のユーザーの語りを手がかりに
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第71回学会大会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 松本 沙羅，會田 宏
2. 発表標題 卓越した女子バスケットボールプレイヤーが獲得した「ピックプレイ」の実践知に関する事例研究 国際レベルで活躍したスクリーナーの語りを手がかりに
3. 学会等名 日本バスケットボール学会第8回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 榎 浩輔，會田 宏
2. 発表標題 ハンドボールの試合における流れの認識に関する事例的研究
3. 学会等名 日本ハンドボール学会第9回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小竹 珠利亜，加藤 貴昭，東海林 祐子
2. 発表標題 陸上競技における記録向上に有効なスキル指導の検討：熟達指導者の言語教示及びアナロジー・スポーツオノマトペに着目して
3. 学会等名 日本コーチング学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤本 元
2. 発表標題 上級者段階の球技チームの試合における監督の状況把握能力に関する研究：ハンドボール競技を例証として
3. 学会等名 日本スポーツ運動学会第34回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田 永子, 中村 剛
2. 発表標題 ハンドボールにおけるゴールキーパーの動感能力に関する研究
3. 学会等名 日本スポーツ運動学会第34回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 東海林 祐子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 ヒューマンサービスとコミュニティ: 支え合う社会の構想	

1. 著者名 藤本 元, 會田 宏 ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑波大学出版会	5. 総ページ数 288
3. 書名 競技スポーツにおけるコーチング・トレーニングの将来展望: 実践と研究の場における知と技の好循環を求めて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>コーチングのジレンマ  <a href="https://www.lifeskill-coaching.com/">https://www.lifeskill-coaching.com/</a>          筑波大学ハンドボールコーチング論研究室  <a href="http://hand-lab.taiiku.tsukuba.ac.jp/project.html">http://hand-lab.taiiku.tsukuba.ac.jp/project.html</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤本 元  (Fujimoto Hajime)  (30454862)	筑波大学・体育系・准教授    (12102)	
研究分担者	NEMES ROLAND  (Nemes Roland)  (50718997)	法政大学・スポーツ健康学部・講師    (32675)	
研究分担者	山田 永子  (Yamada Eiko)  (80611110)	筑波大学・体育系・准教授    (12102)	
研究分担者	東海林 祐子  (Tokairin Yuko)  (80439249)	慶應義塾大学・政策・メディア研究科(藤沢)・准教授    (32612)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
スペイン	マドリード工科大学			